

MfG\_J\_origin\_of\_earthenware\_and\_the\_beginning\_of\_Jomon\_pottery  
 土器の起源、縄文土器のはじまり 改訂2025 Oct

縄文の基本的ガイド情報に、二つの講演会、見学会のメモを付記。  
 2024/08/28 馬高講演会春日メモ 馬高遺跡と火焔型土器の文様、その由来  
 2025/10/05 大地の会の秋巡査県内の縄文大遺跡 メモ

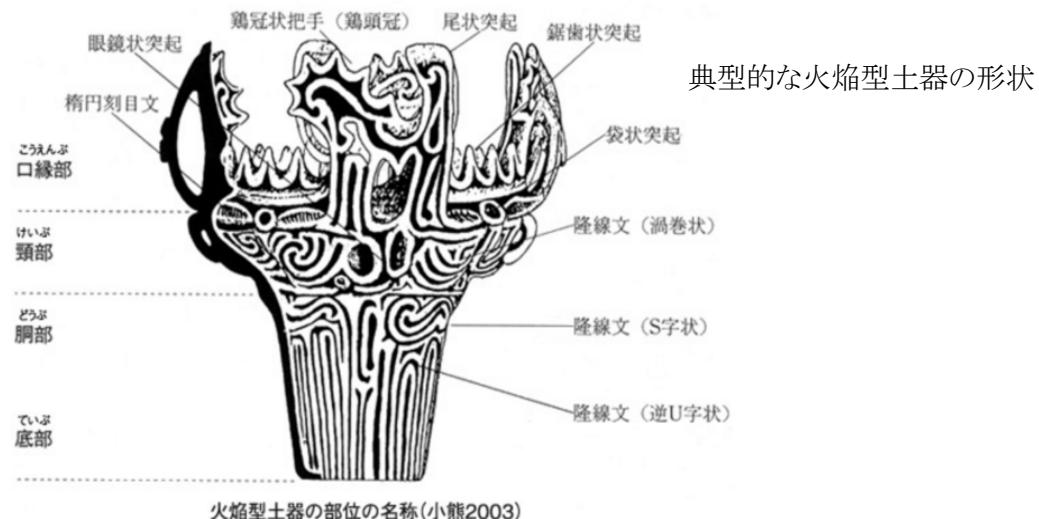
## 目次

### 火焔型土器 参考図

1. 東アジアの土器時代は世界で最も古い地域
2. そこで生れた気候環境は何か
3. 縄文土器とは
4. 馬高遺跡と火焔型土器の文様、その由来 (2024/08/28 馬高講演会メモ )
  - (1) ロケーション
  - (2) 火焔土器、火焔式土器
  - (3) なぜ火焔型土器の出土は新潟県内の信濃川流域に集中か
    - ・縄文時代は、なぜ東日本が優勢か  
～ 対馬海流の日本海流入がトリガー
  - (4) 縄文時代のクリ材
  - (5) 馬高の黒曜石
- 参考 (1) ヤンガードリアス期
- 参考 (2) 火焔土器、地震被災回避の情報の入手について
5. 県内の縄文大遺跡 (2025/10/05 大地の会の秋巡査)
  - (1) 沖ノ原遺跡(国指定史跡)
  - (2) 津南埋蔵文化財センター 「うもれあ」
  - (3) 十日町市博物館
  - (4) 笹山遺跡
 

運動公園と野球場建設で発見、施設建設は、そのまま継続。  
 国宝の一号土器は、残存率95%。中越地震の破損ダメージ大。
  - (5) 馬高縄文館 長岡
- 馬高と三十稻場の位置
- 気候と食糧図 (馬高縄文館)
- ほか、メモ

## 火焔型土器 参考図



参考

- (1) ヤンガードリアス期
- (2) 火焔土器、地震被災回避の情報の入手について  
2019年7月、長岡市立科学博物館 主査 新田康則氏の講演  
2024年8月 長岡市馬高縄文館 館長 小熊博史氏の講演
- (3)長岡市内の、馬高の他の縄文遺跡、いくつかのトピックス

日本の縄文時代、とりわけ東日本の縄文文化の繁栄は、気候変動が決定的だったようです。後日、その視点で改訂したいと思います。



## 1. 東アジアの土器時代は世界で最も古い地域

中国南部やアムール川流域、日本本州島東部の初期土器群は、1万5000年をさかのぼる年代が得られており、一方、西アジア初期土器群は、9000年前とみられている。

東アジアの土器時代は、世界で最も古い土器の故郷である。

これらの地域は互いに隔絶した位置にあり、氷河期後半期に多元的に土器が出現したと考えられる。

ふつう土器の機能は、貯蔵、調理、運搬、供膳、祭祀と考えられるが、東アジアで土器が、何故、農業が生まれた西アジアに先行して生まれたかについては、まだ定説はないが、気候と木の実などの食物に、原因があるのでは、という見方が優勢である。

## 2. そこで生れた気候環境は何か

1万5000年をさかのぼる年代の環境は、まだ氷河期の針葉樹林であり、ドングリやクリなどが繁茂する落葉広葉樹ではなかった。

中国中部・アムール川流域・日本列島では、氷河期の最中から終わり頃、厳しい環境を克服するために、僅かな植物性食料やコケ・樹皮を効率よく摂取する手段として、土器を発明したのではないか、と考えられている。

ドングリは、重量あたりで、サツマイモの2倍近い高カロリー食品である。

最終氷期終末から「寒のもどり」(ヤンガードリアス期)の頃、西アジアではイネ科植物の農耕が始まったが、東アジアは未だ寒く、「森の民」が、木の実のアク取りのための土器づくりを開始したと思われる。

これが、土器の製作が東アジアで始まった理由のひとつとされている。

農耕の起源ともされる、世界規模のヤンガードリアス期に、なぜ日本列島で、イネ科を中心とする農耕の開始にならなかつたのか、その理由は

- 1) イネ科の植物が育つほど、温暖ではなかつた。
- 2) 寒の戻りで、動物が減少し、食糧難になり、ブナ・ナラの落葉広葉樹の森から得ることが必須となり、アク抜きに頼らざるを得なくなつた。ことと、予測されている。

## 3. 縄文土器とは

- 1) Incipient Jomon (c.14,500–8,000 BCE). 旧石器時代からの過渡期
- 2) Initial Jomon (c.8000–5000 BCE).
- 3) Early Jomon (c.5000–2500 BCE).
- 4) Middle Jomon (c.2500?1500 BCE).
- 5) Late Jomon (c.1500?1000 BCE).
- 6) Final Jomon (c.1000?300 BCE).

## 東日本の出来事、世界の氷河期、文明勃興

	East Japan	Earth	World History
1) Incipient Jomon (c.14,500–8,000 BCE)		End of Ice Age	
2) Initial Jomon (c.8000–5000 BCE)		Younger Dryas (*)	
3) Early Jomon (c.5000–2500 BCE)		Warmer than now	Yangtze River civilization
4) Middle Jomon (c.2500–1500 BCE)	Umataka Ruin	Cradle of civilization	Mesopotamia
5) Late Jomon (c.1500–1000 BCE)		cold period	Ancient Egypt
6) Final Jomon (c.1000–300 BCE)			Indus Valley
2,000 years earlier	Paddy rice farming		Yellow River
		cold period	

Younger Dryas (\*)

参考1. にまとめた。

#### 4. 馬高遺跡と火炎型土器の文様、その由来(24/08/28 馬高講演会春日メモ)

##### (1) ロケーション

長岡駅から西に七キロ、信濃川の河岸段丘上(\*1)にできた、約4,500年前の縄文中・後期の住居跡とされている。この段丘は6万年前の関原段丘の後、3万年前にできた藤橋段丘である。ゆるやかに傾斜する河岸段丘上に、東西で150m、南北で250mほどの環状集落跡で、小さな沢をはさんで東に馬高遺跡、西に三十稻場遺跡とわかつて所在している。

当時は最終氷河期の縄文海進と新潟平野の沈降により、海岸線は長岡近くにまで及んでおり、火炎土器が出土した関原丘陵は信濃川の河岸段丘上にあって、狩猟採集生活に適した場所だったと考えてよいと思う。馬高は県内でも最大級の縄文中期(約4,500年前)の集落址で、その長径約70メートルの「北のムラ」が、50メートルの「南のムラ」に移った。火炎土器、火炎型土器は、「北のムラ」のみで出土している。

土器の底に残ったコゲのC14年代測定により、「北のムラ」成立の時期は、5,300年前から4,800年前の500年の間と推定されている。

そして馬高で生活した人々は次の縄文後期(約4,000年前)になると三十稻場に生活の場を移した。三十稻場式土器などの多くの出土品は、馬高に匹敵する内容をもっており、馬高とともに新潟県を代表する縄文時代の遺跡である。

(\*1) 河岸段丘では、平らな部分を「段丘面」、川によって削られた部分を「段丘崖」と呼ぶ。段丘崖では湧水が出やすく、縄文時代の人々は、この湧水を求めて段丘面に集落を形成したと考えられる。

##### (2) 火炎土器、火炎式土器

昭和11(1936)年の年末の日に長岡市関原町の馬高遺跡で近藤篤三郎氏(1907-1945)により畠で見つかったと伝えられ、馬高A式1号と命名されていたこの土器は、その形状から誰ともなく「火炎土器」と呼ばれるようになり、この形状の標識土器となった。



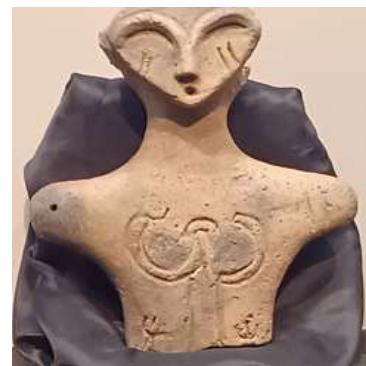
一説では、やはり遺跡調査を趣味とする父、近藤勘次郎氏(1882-1949)が火炎土器と命名したとされる。

年末の当日、最初に大きな石棒と小さな土偶が発掘され、次いで10から20にバラバラの土器破片が見つかった。合わせてみると殆どが拾われており、重さ3キロの美しい「火炎のような」飾りのついた土器であった。

小さな土偶は、古代の抽象芸術ともいえる女性をかたどったものであり、「ミス馬高」と呼ばれている。

その後の本格的調査により、膨大な土器、出土品が発掘され、馬高縄文館に陳列されているものは、この極く一部。

土器破片は、膨大な量で、収蔵庫内の多くの箱に収納されている。



火炎型土器の特徴は、大きな炎のような土器の取っ手の形状。

日本の中高地の動物装飾付土器と火炎型土器に類似点が見られ、イノシシ・ヘビの造形ではないかという説もある。

既に、そのころ、イノシシは家畜化されていたと云われている。

火炎型土器の中段には「ハート型の窓」のあるものが多くあり、個人的には魔除けのシンボル「猪の目」の原型と見たい。(春日の仮説)

火炎土器様式には、火炎型土器や玉冠型土器などの分類がある。火炎土器様式のもっとも大きな特徴は、縄文土器でありながら縄目文様がないこと。また鶏頭冠や短冊形突起と呼ばれる4つの突起、口縁部に袋のように付く袋状突起などがあり、さらにはトンボ眼鏡、S字状文、渦巻状文など、独特の文様が一定のパターンで施されていることが大きな特徴である。

一つの遺跡からは、必ずこの両者が揃って出土するため、縄文人が、2つのものを対立させるという考え方を持っていたことが分かる。

新潟県下の遺跡から出土する火炎土器群は、このような複雑な特徴をきちんと守って作られていることから、それぞれの特徴に意味があり、全体を通して物語があるからこそ、すべてを忠実に再現できるのだと考えられる。これは、「二者が意図的に作り分けられた」ということを表す。少なくとも同じ用途ではなく、それに別の目的があったことを意味するのである。

(3)なぜ火炎型土器の出土は新潟県内の信濃川流域に集中か

火炎型土器の出土は新潟県内の信濃川流域に集中。他の地域には、類型はあっても、あのデザインと大きさを備えた物はありません。なぜ新潟県内に集中しているのか、なぜあの形なのか。

「パーツパーツを見ると、他地域との類似点もありますが、4つの大きな鶏頭冠

突起(けいとうかんとつき)とフリルのような鋸歯状の縁取りの組み合わせなどパターン化されているのは、新潟の火焔型土器ならでは」と言う専門家(新潟県立歴史博物館・専門研究員の宮尾亨さん)もおられます。

・縄文時代は、なぜ東日本が優勢か～ 対馬海流の日本海流入がトリガー 縄文土器の出現は、気候の変化に伴う植物相の変化と密接な関係がある。一万年前、対馬海流が日本海に流入し、東日本にはブナやナラなどの落葉広葉樹林が、西日本にはシイなどの照葉樹林が多いが、縄文土器の出現は、気候の変化に伴う植物相の変化と密接な関係があつたらしい。対馬海流の日本海流入は冬期の積雪をもたらし、豊富な雪解け水が縄文人の生活を大きく変えたのである。

新しく日本に広がった落葉広葉樹林は、森林の中で採取可能なドングリやクリ、クルミのほか、カタクリ、ワラビ、ヤマノイモなど、野生の植物性食料資源は質的にも量的にも大変優れたものだったようで、煮炊きに利用する縄文土器の出現は、これらの食糧活用に、大いに貢献した。

#### (4)縄文時代のクリ材

縄文時代前期、西日本から中部地方では、常緑樹の分布が拡大しているのに対し、東日本ではおおいに様相が異なり、本州の最北端に位置する青森県の三内丸山遺跡をはじめ、トネリコ属、カエデ属、ケヤキ、ムクノキ、クリなどの落葉広葉樹が優占している。関東地方の内陸部でも、コナラ属のクヌギおよびコナラ、それにクリ、ハンノキ、サクラなどの暖温帯から冷温帯に生える落葉広葉樹が卓越している。そして、この西日本と東日本の照葉樹林帶と落葉広葉樹林という対比は、そのまま縄文時代晚期まで引き継がれていることがわかっている。

縄文時代ですから防腐剤はない。そこで選ばれたのが丈夫で腐敗に強い「栗材」でした。建築物で使う「栗材」といえば、最も有名なのが、世界遺産になった「合掌造りの外観」です。特に豪雪地域の五箇山(富山県)では雪の重さに耐えられるように、多くの栗材が使われています。

<https://koboku.org/article/785/>

このように、クリの木というのは万能良材として、今から約15000年前の縄文時代から利用され、実は食料に、木は材料に、いらなくなつた木材は燃やして燃料に、と縄文は栗の時代」と言われるほどよく使われてきました。栗の木は乾燥は難しいのですが、耐久性、耐水性に優れており、一般的に通常の木だと腐食されやすいと言われている家屋の土台や柱の材料として利用され、また、栗は虫の害に対して特別な処理などを必要としないほど、耐性があり、防虫処理のなかつた時代は大変貴重な材料とされていました。 CF. 縄文時代の日本列島におけるウルシとクリの植栽と利用

## 屋外提示の竪穴式住居

内部は入口より40-50cm掘った土間。  
クリの木の柱を植物のツルで巻いて  
立体構造にしたものをカヤで囲ったもの。  
天井は4mほどの高さで、真夏の曇天の  
午後3時頃、外は30度を超えている筈  
だが、住居の内部は涼しかったです。



## (5)馬高の黒曜石

縄文時代は、火山からの副産物である黒曜石が、ほかの素材では代替できない、貴重な刃物の役割をもっており、産地からの入手が必要でした。

長岡地域の縄文遺跡では、県外は長野県産、県内では板山産(新発田市)が一般的ですが、馬高遺跡の場合、県内として、板山産と佐渡産、県外では長野県産(和田峠)のほか、山形県産(月山)、栃木県産(高原山)、東京都産(神津島)が判定されています。

伊豆諸島の神津島とは直線距離で約400kmに及び、遠く離れたいくつかの地方と直接的なつながりがあったのか、ムラからムラへ転々と運ばれてきたのか、わかりませんが、広範囲にわたる交流をうかがわせるとともに、馬高自体が交流の拠点であった可能性を感じさせます。

**補足** また、講演後の館内見学中に、館長さんに質問。

配付資料にもあった火炎土器の「ハート型の窓」について、『日本古来からの魔除けの、猪の目と考えるのは間違いでしょか。』とお聞きした。館長さんは、「わからないのです。」ということでした。私の推察に過ぎないが、農耕を開始した縄文時代は、シノシシも恐怖であった筈で、それを逆手にとって魔除けとした私見は、納得できるストーリーだと思います。

ブタがイノシシの家畜化されたものであることは広く知られています。その家畜化はおよそ1万年前に始まったとされていますので、シノシシは恐怖である一方、ブタは食糧危機を防ぐ大切な家畜であり、「魔除け」のイメージに符合していると考えます。

「十日町市の火焰型土器の方が、国宝に認定」の件、関係者は余り発信していないが、どうも、馬高の第一号の火焰土器は、出土時も幸いに残存率は高かったが、かなり細かく割れていた、つまり細分化個数が大きかった。文化財としての評価には、文化的完成度の高さとともに、出土時の細分化個数が小さいこと、残存率が高いこと、などがあるのでしよう。その点、十日町市笹山遺跡の出土の国宝対象品は、上回っていたのでは。

## 参考 (1) ヤンガードリアス期

(\*) Younger Dryas, also called Younger Dryas stadial, cool period between roughly 12,900 and 11,600 years ago that disrupted the prevailing warming trend occurring at the end of the Pleistocene Epoch.

ヤンガードリアス(Younger Dryas)は、更新世の終りのヨーロッパの気候区分で、最終氷期が終わり温暖化が始まった状態から急激に寒冷化に戻った亜氷期の期間である。

ヤンガードリアス期の寒冷化はヤンガードリアスイベント(YD)とも呼ばれる。

これは、最終氷期の終了に伴う温暖期(亜氷期の「ベーリング/アレレード期」という期間の後に、 $1300 \pm 70$  年間続いた気候寒冷期である。

ヤンガードリアス期の年代は暦年代で1万2900年前 - 1万1500年前、放射性炭素年代で1万1000年前 - 1万年前とされている。ヤンガードリアス期の後は完新世の「プレボレアル期」(亜間氷期)に移行する。

まさに更新世と完新世の間で、その区間を縄文時代は、またがっている。なお、アレレード期の前の亜氷期は「古ドリアス期」とも呼ばれた時代で、ヤンガードリアス期のおよそ1000年前に300年ほど続いた。

年代	地質時代	歴史時代	気候変化	地形的現象	歴史的事項
500年前	第 四 紀	完 新 世	明治・大正・昭和	(温暖化)	
			安土桃山・江戸	小氷期 カロンギリアン海退	新期扇状地面の形成
			室町時代	(寒冷化)	海岸湿地の乾燥化、新砂丘Ⅲの形成
			鎌倉時代		
			奈良・平安時代	中世温暖期、平安(ダンケルク)海進	三角州の一部が海中に没する
			古墳時代	古墳寒冷期	新砂丘Ⅱの形成
			弥生時代	ローマ海退	古期扇状地面
			後・晚期	(寒冷化)	古期扇状地面・古期氾濫原面の段丘化
			縄文中期		新砂丘Ⅰの形成
			縄文(フランドリアン)海進		信濃川三角州の形成が始まる
1万年前		更 新 世	早・前期	ヒブシサーマル期 ヤンガードリアス期 (温暖化)	
			後期		
			旧石器時代	最終氷期 氷河時代が始まる	古期扇状地面の形成
			前 期		新潟平野周辺に人が住み始める
			前 期		
180万年前		第三 紀	鮮新世		更新世段丘
			中新世		更新世後期まで地殻変動が続く
			前 期		激しい海底火山活動を伴う堆積作用
			白 亜 紀		日本海の拡大 櫛形・五頭山地の花崗岩類 朝日・飯豊山地の花崗岩類

## 参考 (2) 火焰土器、地震被災回避の情報の入手について

2024/08/28 春日

中越地震の時、火焰土器が、たまたま海外の展覧会に出品中だったため、奇跡的に中越地震による被災を免れたことは、知っていました。

その展覧会の内容は不明でしたが、今回の館長さんの講演資料で、その展示会関連のパワポ紹介があり、展示会の名称らしきものをメモできました。そして帰宅後、ネットで検索し、まさに望みの情報を得ることができました。

(1) 2019年7月、長岡市立科学博物館 主査 新田康則氏の講演での情報  
(越路文化会館で開催の、「越路大地の会」での講演で、以下の話。)

火焰土器の海外出品・展示のおもなもの

1963 年パリ市立プティ・パレ美術館「日本美術展」が最初

2004 年ドイツのライス・エンゲルホルン博物館

「日本考古学—曙光の時代展」

2012 年大英博物館「炎と水の器展」

火焰型土器 ～ 2016 年10月から大英博物館で火焰型土器を常設展示

阪神淡路大震災以降、震災対策として免振台の設置や、テグスでの固定が普及していたにもかかわらず、新潟県中越地震でも、笛山遺跡の国宝・火焰型土器をはじめ、多くの土器が被災したが、馬高の火焰土器は、海外に出展していたため、奇跡的に中越地震による被災を免れた。

ライス・エンゲルホルン博物館は、1763年に創設されたアカデミーを起源とする、多くの博物館や研究施設が形成する複合体施設として知られ、考古学については、ヨーロッパ屈指の博物館。

～十日町ほか、県内に展示されていた土器の展示品は、地震で破損が激しく、多くは補修できましたが、大変な苦労があったと聞いています  
大変な自然災害でしたか、この海外展示は幸いでした。

(2) 2024年8月28日 長岡市馬高縄文館 館長 小熊博史氏の講演

～そのとき、長岡の火焰土器は海外展示中という話のパワポで

展示会の名称らしき Zeit der Morgenrote を見かけ、メモしました。

以下、ネットから得られた情報。

<https://www.smb.museum/ausstellungen/detail/zeit-der-morgenroete-japans-archaeologie-und-geschichte-bis-zu-den-ersten-kaisern/>

Zeit der Morgenröte. Japans Archäologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern

Gropius Bau

Niederkirchnerstr. 7  
10963 Berlin

Zeit der Morgenröte は「夜明けの時」

20.11.2004 bis 31.01.2005 開催期間らしい

地震は11/20開催の1か月前だが、輸送中か。

以下、展覧会の内容説明、Google翻訳による

ベルリン・フェスティバル、ベルリン国立博物館先史・初期史博物館、マンハイム・リース・エンゲルホルン博物館、文化庁文化庁、国際交流基金共催による展覧会。

グロピウス館1階の展覧会「夜明けの時」では、55の博物館や研究機関が所蔵する1,500点の資料、文書、国宝を用いて、石器時代からの日本の歴史の連續性と激動を世界で初めて紹介する。7世紀から8世紀の仏教の拡大に至るまで、4,500年前の最古の遺産です。

展覧会の焦点は、狩猟採集社会があった縄文時代、稻作が始まった弥生時代、記念碑的な墓があった古墳時代、そして壮大な宮殿があつた飛鳥時代と奈良時代の4つの主要な時代です。

展示品全体の多くはこの国の最も重要な文化財であり、  
今日に至るまで日本とその住民の自己イメージを形成し続けています。

～日本からの出品リスト全体は知りえませんが、縄文時代を含む古代から仏教伝来の飛鳥・奈良時代の終わりまでの日本文化を紹介する、大規模な企画展示会だったようです。会場もベルリンの歴史的建造物のようです。そこに、長岡から「火焔土器」ほかの重要文化財も出展されていたのです。奇跡的に中越地震による被災を免れた、海外展示会の開催期間と、その開催趣旨がわかり、良かったです。

中越地震関連で説明するときの話に、グンと厚みができました。  
よいストーリーになると思います。

参考 (3)長岡市内の、馬高の他の縄文遺跡、いくつかのトピックス

長岡には、西山丘陵の馬高遺跡だけではなく、東山にも多くの縄文遺跡があります。 ふたつだけ、紹介します。

・「山下」(さんか)遺跡 (長岡市柿町)

信濃川右岸側で柿川の上流域に位置しています。遺跡名の山下(さんか)は、中世の館を意味する字名を意味しているとのこと。1964・67年に長岡高校の人文科学部と長岡市立科学博物館が発掘調査を行ない、縄文時代中期前半を中心とする多量の遺物が発見されました。

特に火焔型土器群でも古い段階の資料がまとまって出土しており、北陸・東北・関東など他地方の影響を受けながら火焔土器の様式が誕生した様子をよく示しているとのこと。遺物の出土量や内容から、近くの青木遺跡、見附耳取遺跡など東山丘陵沿いに分布する縄文遺跡の拠点的集落であったと考えられます。こんな大きな遺跡があったということは、長期間、信濃川が近くを流れ、大きな段丘を形成していたことを示すものであり、驚きです。

・大珠が日本経済新聞に紹介された、栃尾の栃倉遺跡 (長岡市金沢)

金沢の栃倉遺跡は、蔵王権現で知られる榆原から1km南にあり、栃尾地域の中央部を流れる刈谷田川右岸の段丘上に位置しています。昭和30・31年に栃尾市教育委員会が発掘調査を行い、縄文時代中期の竪穴住居11棟が発見されました。その床の中央には石で卵形や長方形に囲った特徴的な石組炉が築かれていました。出土した遺物には、火焔型土器を含む多量の縄文土器や石鏸・石斧などの石器類があります。このうち、住居の床面や柱穴に意図的に埋めたような状態で出土した土偶が3例あり、当時の信仰にかかる特殊な事例として注目されます。

発掘された大珠が、大きなカラー写真付きで日本経済新聞日曜版の美術欄に紹介されました。(2024 3/31 )  
(右図、大きさは、各々9.2cm, 6.6cm)



有力者を埋葬したときの副葬品と考えられています。ヒスイの分布の範囲が広いこと、山間部の段丘面でも、段丘崖では湧水が出やすく、川があれば魚も獲れたため、縄文の生活ができたことなど、いろいろ考えさせられます。

## 5. 県内の縄文大遺跡 (2025 大地の会の秋巡検 10/5)

### 一号車 新田先生

中越一帯の沖積平野に、縄文の遺跡はない。小栗田原など、段丘上に遺跡。「高位段丘面」である「越路原」の標高は約190mなのに対し、「中位段丘面」の「小栗田原」の標高は約80mと、かなりギャップがある。一方、「低位段丘面」の標高は約42mとなっており、中位段丘面より更に一段低くなっている。

### 山本山 全国有数の隆起

#### 1. 沖ノ原遺跡(国指定史跡)

信濃川右岸、中津川左岸の段丘面(米原Ⅱ面)、標高450mほどに位置している縄文時代の遺跡です。本遺跡は、昭和47年に調査が開始され、縄文中期(5000-4000年前)の典型的な村落形態を示すのみでなく、大規模であり、そのうえ遺存状態がきわめて良好なため、昭和53年に、国指定史跡指定。保存面積 約2万4千平方メートル。調査済は一割。気候は、積雪量を含め、現在に似ているという。

(山並みの後ろに、見えないが、苗場山)  
山並み



## 2. 津南埋蔵文化財センター 「うもれあ」

近日開館の施設で10/5は町民内覧会。

いままで津南町で七ヵ所に分散していた文化財を、旧津南町立小学校の校舎をリフォーム統合。

(津南町は昔から埋蔵文化財が充実)

図書館機能もあり、全国で

発行の雑誌・本も収集庫に。

近々、近代洋画の巨匠・林武画伯の  
絵画を20点ほど寄贈を受けること。

そのための展示室もつくること。

～ これを目当てに再三訪問する人も出てくると思う  
体育館の改修は圧巻。全体の展示も素晴らしい。

右図は、追加したギャラリー回廊から俯瞰したもの



## 3. 十日町市博物館

### 4. 笹山遺跡

運動公園と野球場建設で発見、施設建設は、そのまま継続。

国宝の一号土器は、残存率95%。中越地震の破損ダメージ大。

## 5. 馬高縄文館 長岡

**土器** 十日町の土器と、堀之内までの間の土器は似ている

南魚沼、中魚沼とは異なる

～ 文化圏が異なるということ。

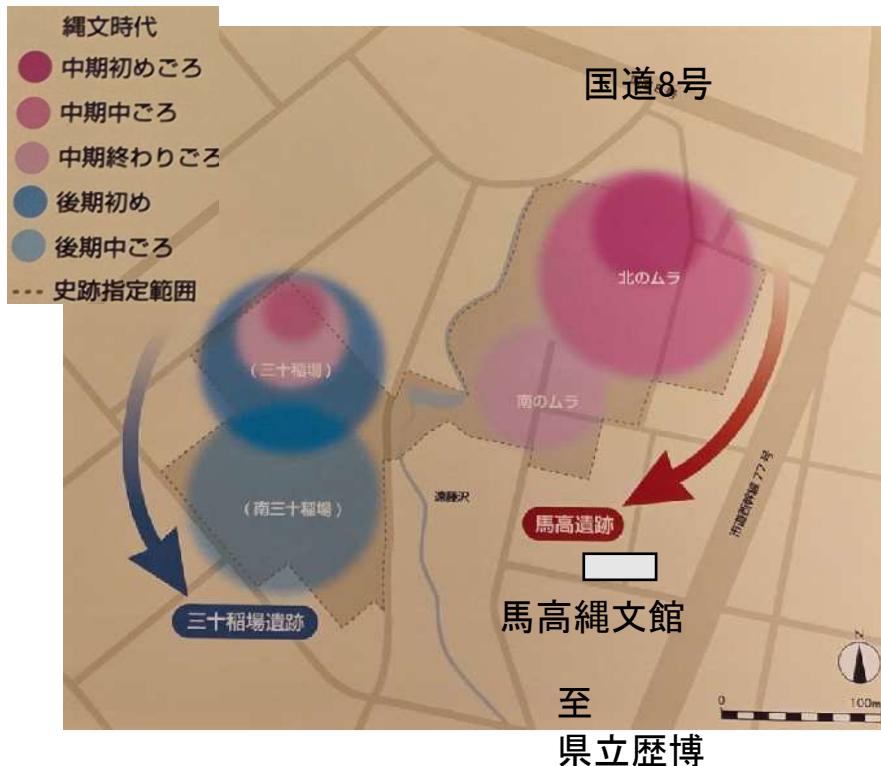
**栗** 食糧のみならず、建材としても腐食しにくいなど、有用。

実を採集するためには、間引く。

建材として育てるには、密集させる。

杉のように直立。

縄文時代のトチ(栎の実)は、アク抜きという手間をかけて加工され、  
主食や保存食として重要だったと考えられています。遺跡からは大量の  
トチの実が出土しており、ドングリや栗など他の木の実と共に、縄文人の  
食生活を支えていた主要な食材でした。 アク抜きは補足参照



馬高の「北のムラ」では、中期初めころ北側から住居が作られ、やがて中央部に範囲が広がり、環状の形になった。中期週末にはムラの規模は小さくなり、南方の「南のムラ」に住まいを移す。

一方、遠藤沢を挟んだ三十稻場では、中期中頃から小さなムラが北部に作られ始め、後期に入ると大きく広がり、ながてムラの中心を南に移していった。馬高と三十稻場、いずれも遺跡は北から南への動きである。

笹山の国宝土器 46.5\*35  
 火焰土器 35\*35

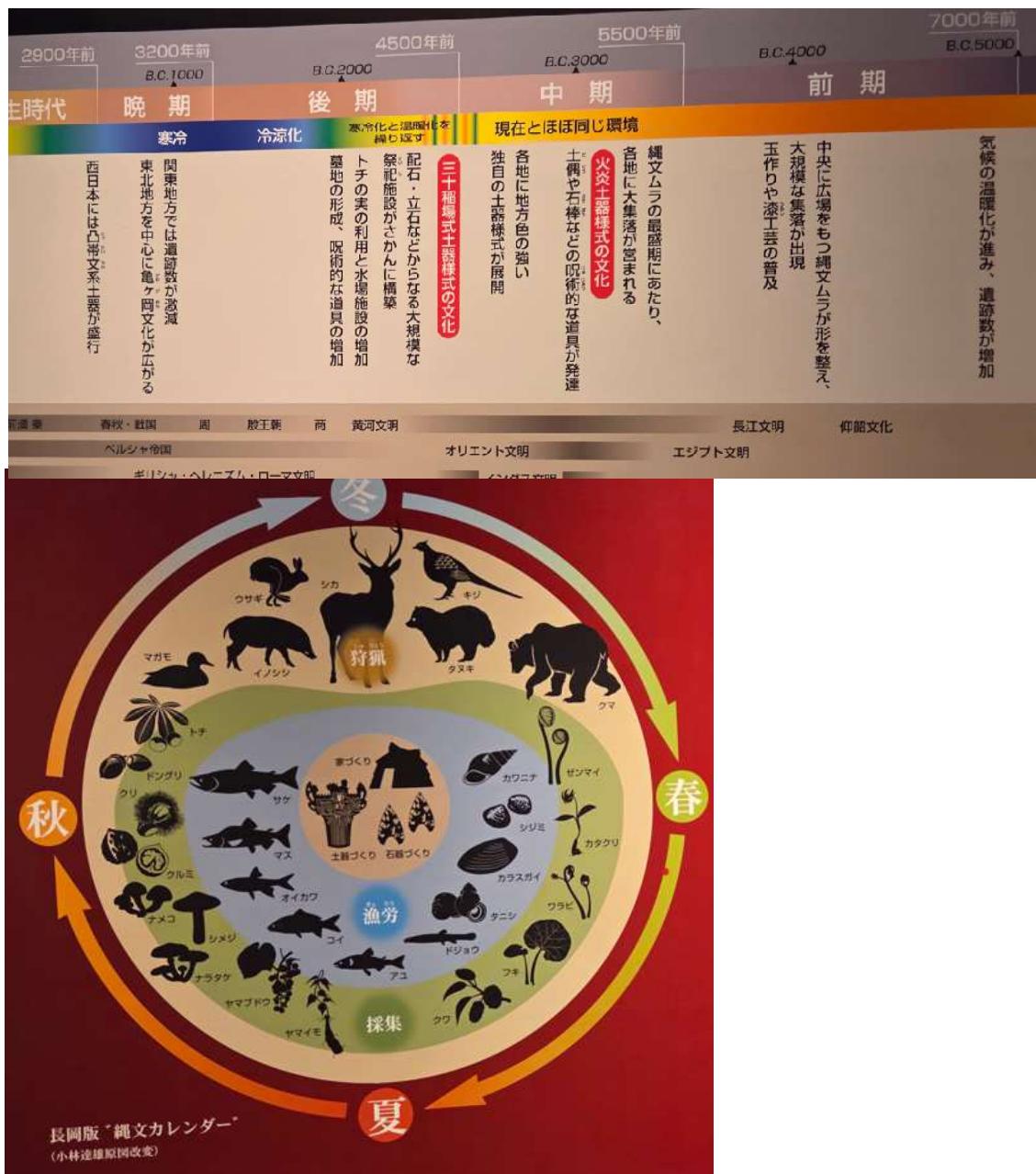
宮尾先生、新田先生より  
「火焰土器」は長岡市が商標登録。ほかでは使用できない。  
一般名称として、「火炎土器」

宮尾先生のコメント

ハート型 この形が構造的に適しているが、何を意味しているかは不明。  
縄文 縄目か、波形か、何を意味しているかは不明。



## 気候と食糧図（馬高縄文館）



## 食糧について

### サケの遡上

東日本の旧石器文化、縄文文化繁栄に、極めて重要である。

## 縄文時代におけるトチの実の利用

主食としての重要性:トチの実はデンプンを多く含み、保存食としても重宝された。稲作が主流となる前の縄文時代において、クリやドングリなどと共に重要な食料源だった。

アク抜きの必要性:トチの実にはサポニンやタンニンなどの苦み成分が強く含まれているため、そのままでは食べられない。

乾燥させたトチの実を熱湯につけて一晩置き、ふやけた実から固い皮をむく。

さらに渋皮をむき、薄く切って水にさらしたり、木灰でできた灰汁に混ぜてアクを抜いたりして調理する。

## 途中の旧石器遺跡

旧石器・正面ヶ原D遺跡(新潟県最古) しょうめんがはら  
中魚沼郡津南町正面

## 日本で最古クラスの旧石器時代遺跡

正面ヶ原D遺跡は、新潟県で最も古い人類の痕跡を残す遺跡です。およそ3万年以上前の人類の痕跡である石器が出土しました。

遺跡は、信濃川右岸の正面段丘面に位置し、おおよそ2.2万年前に降り積もったとされる始良丹沢火山灰層よりも下層から、刃の部分を磨いた局部磨製石斧という石斧など、たくさんの石器が出土しています。

段丘の形成や火山灰の存在と人類の活動を結びつけることができる最古の遺跡となっています。

この遺跡は発掘調査後、盛土保存されており、現在は水田となっています。出土した石器は、津南町歴史民俗資料館と農と縄文の体験実習館なじょもんに展示されています。

## しょうめんがはらでいいせき

龍ヶ窪の水(りゅうがくぼのみず)を使っていたと思われる。

苗場溶岩層とその上のローム層との境から湧水があり、  
その一つが日本百名水の「龍ヶ窪」です。

昔から守られてきた自然に囲まれた池から現在、1日量43,000t湧き出ており、  
1日1回池全体の水が入れ替わる。これほどの豊富で良質な湧水は近くには  
見られない。

南西から北東方向に長径220m、短径70m、水深1.5～2m、  
面積11,900平方メートルの形状を成す池の右岸側から地下水が湧き  
出て、北へ向かう水路から流出している。

標高450m付近の河岸段丘地にあり、林相が変化に富み自然環境が  
優れていることから県の自然環境保全地域に指定され守られている。  
池は落葉広葉樹林に取り囲まれ野鳥相は種類・数ともに多く、カワマスの  
他多くの動物が生息している。